

---

# ソロモンの鍵

直木小生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ソロモンの鍵

### 【Zコード】

Z3986M

### 【作者名】

直木小生

### 【あらすじ】

魔法が発達している国バザルには学園に通うものが住む町フィシリアがある。そこにある国立魔法学園に通うスレイ。ところが、彼の魔力はほとんどなかつた。彼を待ち受ける運命とは！？

謎の指輪、隠された魔術陣、隠された属性の意味が明かされる時、待ち受ける真実。

鍵の意味が明かされる時物語は始まる。



## 序章

そこにはたくさんのかがいた、  
そこにいた何かは負の感情が集まつたもの  
遠い昔、一人の王が封じたもの  
だが、この世に永遠などは存在しない  
いずれ封じたものは暴れ、天災となり人々を苦しめ、  
この世を悪しき姿へと変えるだろう  
その時の為にこの鍵を残す。

-----

その日の田覚めは特に悪くなかった  
何があるとすれば昨日夜遅くまで  
本を読んでいて若干寝不足なくらいだ  
だが、何やら家中が騒がしかつた  
まだ寝ぼけている脳を働かせ  
声がする方に歩くといふと、

両親がなにやら異様に喜んでいた。

田を凝らしてみるとそこには

「国立魔法学園合格通知」と書かれた封筒があった。

## 出会い

寝ぼけていた頭が瞬時に覚醒した

俺があの国立魔法学園に合格？

国立魔法学園とは王族や一部の上級貴族しか通えないまさにトップエリートが集まる学校なのだ。

しかし、つむぎは下級貴族の中では若干地位は上の方だがそれでも所詮は下級貴族といったところである。

親父も一応、研究所勤務だがろくに昇進もしない万年平研究員である。

母さんは一応上級貴族出身らしいのだが、今ではその輝きは失せている。

昔の写真を見る限りではそれなりの美人だったのだが、今はビリビリでもいるただの主婦に成り下がっている。

何故親父と結婚したのか今でも謎だ。

とまあこんな感じの一般家庭（一応貴族なのだから……）なのである。

もちろん受験はしたけどあくまで記念受験である。俺なんかが受かるわけがないからだ。

学力検査以外にも血液検査や、魔力検査など色々な適性検査をしたが、特に受験生の中で秀でているところは無かつた（ぶつちやけ、一番駄目と言つても過言では無かつたよつこも思えた）

なのに、合格ですか？念のため宛て先を確認したが「フレイマン・ギルバード」と確かに俺の名前が書かれていた。

ようやく現実を認め、リビングを見返してみたら両親の姿がなかつた。

おそらく近所の人たちの所にでも行つて自慢話でもしているのだろう。、まったく困った両親である。まあ気持ちは分からなくはないけど。

一人残された俺は合格通知書の封筒に入つていた入学要項を読んでみるとついでに、テーブルの上有るスコーンとポテトサラダをいただくことにした。

「バラバラと読み飛ばしながら見ていくと、「指輪は本校で用意いたします……」と書かれた一文に目がとまつた。

指輪とゆづのはもちろん装飾品の一種だが、魔法を使う者たちにとって重要な補助アイテムとなつてゐる。

中には色々と便利な機能があるものがある具体的に言えればつけているだけで魔力の量や質が上がるといった具合だ。

だが、優れた指輪をつければいきなり優れた魔法使いになれるわけではない。優れた指輪ほど使い手を選ぶとされており、優秀な魔法使いでも認められないことはざらにある。

何故そんなことになつているのかは不明だが一説では魔界や天界、または神と契約した証ともいわれていており、だからそれぞれ選定条件があるとのことらしい。

よつて、つけている指輪の質が魔法使いとしての格を表していると言つても過言ではない。

それほど重要なものなのだ。

ちなみに俺が使つているのは親父が子どものころ使つていたものでこれといった機能もなにも付いていないただの安物である。

学園に入つたら周りの奴らどうせ高級品の指輪をつけてくるに決まつていて、こんなところで差をつけられたらたまつたものではない。

それ以外には特に重要な所は無かつたように思えたし、ちょうどよい眠気が襲つてきたので自分の部屋に戻つて寝ることにした。

-----

次に起きた時はもう夕方だった。

さすがに一日中寝たままで過ごすのは悪いと思つので外に散歩にも行くことにした。

いざ出かけようと思つて玄関から外に出てみたら門の前で人が集まつていた。

何事かと思い門の横にある勝手口から外に出てみたところ、俺に出てきたと気がついた瞬間集まっていた人達が俺の方に走ってきたと思つたらいきなり囮まれてしまつた。

よく見たら全員近所の人だつた、合格の知らせを聞きつけて来てくれたのだろう。

しかし、隣町の奴まで来てるつてやうことはほんちの両親はどこまで話を広めれば気が済むのだろう？

集まつた人たちのテンションが異常に高く一人一人相手するのが面倒だつた

皆と別れる時、「出発する時、皆で見送りにいくからね」と言われた、とても嬉しい反面恥ずかしくもあつたので、背を向けたまま手も振つて別れを告げた。

目的もないまま歩いていたら繁華街まで来ていた。

その中でも今いる中央通りは休日ともなると出店や屋台などが広がりちょっとしたお祭りムードに包まれること、

それにこの通りは色々な店が軒を連ねていてここに来るだけで大抵の物がそろつてしまふなどのことで有名だ。

奥に進んで見るとちょっとした広間に出了、そこでは皆が中央に視線を向けていた。

そこにはピエロの格好をした曲芸師が玉乗りをしながら火を吹いていた、いかにも貴族つて感じの人達は見向きもしない。

だが、庶民はもの珍しそう見ているそれは彼らが魔法を使えないからである。

この世界では魔法を扱える者は貴族だけと定められている、それは魔法律と言つて簡単に言つと魔法を使う者に対する（必ずしもそうとは言えないが）ルールである。それを破つてでもしたら、聖騎士パラディンと呼ばれる人たちが直接処罰しにくるシステムだ。

だが、俺にとつては火を吹くことなど日常茶飯のレベルなので別に見たい思わない、さらに奥に進んでみるとした。

そこには奇妙なことが起つていた、しかもそれは俺にしか感知できぬみたいだ

人で混み合つ道、その中の一点だけ人が無意識に避けているところフードで隠している

そこにいたのは見るからに怪しい人だった、全身をコート覆い顔は見た感じでは体はあまり大きくないみたいで、身長もせいぜい150センチぐらいである

旅行者ならこのような格好をしていてもおかしくはないのだが、それでも周りの人人が無意識的に避けているのは異様な光景だ。

何故だろ、俺はあの人に話しかけなければいけないような気がしてしまった。

これが貴族の義務ノフレス・オブリージュとゆづやつか實にくだらないものである

貴族は庶民を守らねばならない、そんな古めかしいものに従つ氣など今までなかつたのだが。

今になつて貴族の義務に従うのは續だが仕方ない、そつ心に言ひ聞かせてその人の方に向かつた。

本当に小さいな、ガキ子どもか？

トン、肩に触れた瞬間「ひやうー」となんとも女の子らしい声を上げながら10センチぐらい飛び上がつた。

そんなに驚くことはないだらう。

飛び上がつたとき被つていたフードがとれて、隠されていた頭が現れた。

栗色のツヤツとしたきれいな髪、エメラルドのような鮮やかな緑色の目そして、作為的ではないかと思つぐらい整つた顔立ち。

恐ろしいほどの美少女が目の前に現れた。

あまりの驚きに言葉を失つてゐる、

「い、いきなり何するのよー、ま、ま、まさかこれが噂に聞く変態つてやつなのねーー！」

「ゴジン、なぜいきなり初対面の人に変態扱いされなければいけないのだ。

やつ思つ前に手が出てしまつた。

「反省はしているだが、後悔はしていない。

きゅうと言いながら頭を押されながら涙目でこちらを見んできた  
のだがまったく怖くはない。

「な、なんで殴るのよ…痛いじゃしゃ……痛いじゃない」

何故そこで噛むんだよ。

「知るか、いきなり変態扱いする方が悪い」

「なんですってー!」んなかわいい子を殴つておいてただで済むと思  
つてゐるの……

ガルルとまるで犬のよつて唸りだした、まったくこれだから子ども  
はめんどくさい。

しうがない、厄介事になる前に折れやるか……

「わかつたよ、俺が悪かったって」

「ふん、分かればいいのよ」

「さうか、それじゃあ俺行くから

立ち去りつとしたが袖を掴まれた、「待ちなさい、ただでは帰さな  
いわよ」

今何をしていいかと迷いつと荷物持ちである。

お嬢さんは買い物に来たそうなのだが、道が分からぬから案内し  
ることだった。

そこまではいいのだが、買ったものを全てに預けてきやがつた。

最初の頃はこのくらいは持つてやるかと紳士的な態度をとったのが  
間違えだつた。

両手が塞がる程度ならまだいいが、すでに肩の辺りまでできているの  
だが、この娘はまだ買つてしまらしき

（あらそろ限界なのだが……）と思つてこると、

「そんな顔してるんじゃないわよ、次で最後にしてあげるから頑張  
りなさい」

そういうながら、彼女は足早に店の中に入つて行つたが、俺は非常  
に入りづらい。

そこはこの街でも一、二を争つ高級魔装飾品店であり

もちろん俺なんかが入れる所ではなく、上級貴族の用達の店だ。

入るのをためらつてると彼女が店内から出てきて

「なんで、入ってこないのよほら、早く来なさい！」

と無理矢理手首を掴まれて店の中に入つたいや、入つてしまつた。

ホントに勘弁してください

そして入つたはいいが店員の目が痛い、明らかに場違いなのが分かる。

彼女はそんなこと気にしないまたは気付いていないかのような感じでどんどん奥に進む、

するとあるショーケースの前で止まつた、

「ねえ、どうちがいいと思つ？」

黒とピンクのロープが田の前に出された。

「やうだなあ…………」うちの黒の「やうぱんぱん」にしよう――

と俺が言つ前に勝手に決めてしまつた、（だつたら俺に聞くな……）

「すいません、これ下を」

呼ぶてやつてきたのは店主らしきアゴヒゲを蓄えた男性、しかも俺らが入店してからずっとマークしてた。

「失礼ですが、御予算の程は？」

当然の疑問である、こんな子どもが大金を持っているわけがない、それを見越してのことがショーケースを開ける為の鍵を持って来て

いないようだ。完全に舐められている。

しかし、そんな浅はかな考えは見事に裏切られる事になる。

「予算?」れへりこあれば足つるでしょ」

そういうて腰に提げてあつた袋を店員に差し出すと店員は中を見た瞬間一步退いた。それは驚きのあまりとつてしまつた反射的反応。田を見開いたまま店員は

「け、結構でござります。すぐござ用意をせて頂きます。」

と急いで鍵を取りに行つてしまつた。

後で見をせしもひつたがそこには家一軒余裕で買えるほどどの大量の金貨が袋の中に収まつていた。

ショーケースが開くのを涼しい顔で待つ彼女、この娘は一体何者だろ?。

「あなたは何か買わないの?」

「いや……俺あんまり金無いから。」

あんなに大金を見せられたらこんなちよとの有り金を見せられるわけないし、第一ここに売られている一番安い物でも買えるはずがない。

「いいわよ、おじひてあげても、今日付き合つてもうつた御礼だと思つて頂戴。」

いやいや、女の子に出售してもいいなんてマネ男として出来ないし、ここにある物は親父が汗水流して働いた金なんて、それ稼いだって言えるのと思えるぐらい高価な物ばかりだ。

でも断るのはもったいないような……

「どうしたの？早く決めなさい。」

「いや……そう言われても……」

「どうくさこわね、いいわ私が決めてあげる。」

「そうねえ……一これが良いわ、すいませんこれ下さー」

「ちよつー？」

俺が頭を悩ませてしどろもどろしている内に、彼女は鍵束を持った来た店員に買い上げの追加をした、指差したのは、黒い魔宝石がついたイヤリングだった。

-----

「ありがとう……？」

店を出た俺の耳には黒い輝きを放つイヤリング。結局買つて貰つてしまつた訳だが、複雑な気分だ。こんな値の張るものももらつて本当にいいのだろうか。

「あら、なんで疑問符が付いているのかしら買わない方が良かつたのかなー？」

「いえっ、ありがとうございますーー！」

「ふん、どう致しまして」

どうにもシンとした口調だが、嬉しそうな顔をして笑っている彼女。それを見ると、じつちまで笑顔になる。

ゴーン、ゴーン、……まるで地響きのように鳴り響く、それは街にある教会にあるとても巨大な鐘の音。

それを聞いてハツとなつた彼女はポケットに手を突っ込んで懐中時計を出して時間を確認するなりなや、急に「こっちに来て」と手を引っ張られ小道に入つた。

ポケットの中から魔法陣らしきものが書かれている紙を手に持ち、パチンと指を鳴らしたかと思うと紙に書かれている文字が光りだして彼女の足元に魔法陣が展開された。

あまりにも唐突だったので見ているしかなかつた。

「ほらー、ほさつとしないで荷物を陣の中に入れて、早くー！」

その一声にハツとなつて持つていてる紙袋を全部陣の中に下ろした。

「今日はありがと、とても楽しかったわ・また会えたらいいわね

彼女は微笑みながらそう言って

『我望ム彼方へ“転移”』

行ってしまった。

光ったと思つたら目の前の彼女と大量にあつた買い物袋が跡形もなく消えた。

あまりにも唐突過ぎることだったので夢、幻かと疑うが、耳にあるこのイヤリングが現実だと認識させる。

彼女はいったい何者だったのだろうか？せっかくだから名前ぐらいは聞いておくべきだった、今度御礼もしたい。

…………大したことはできないのが悲しいけどね。

そんなことを考えながら帰路に着く。

今日は何でいい日だったのだろう。国立魔法学園の合格、可愛い娘との買い物……荷物持ち国立魔法学園の合格、可愛い娘との買い物……荷物持ちだけだったような気がするが気にしない

とにかく、気持ち良く帰り道を歩いていた。

「貧乏貴族がお出かけですか？」

詰めが甘かった。なんで今日に限つて「イツ」と会つちまうんだよ、どうやら神様は俺が嫌いらしい。  
ちくしょう、いつもみたいに裏道を通ればよかつた、  
そつすれば「イツの憎たらしい顔なんて見なくて済んだのに。

「なんですね、その不満そうな顔は。文句でもあるんですの？」

「イツは嫌みしか言えないのか、家のことを馬鹿にされて不満が無いかと思つてゐるのか。

でも、家柄上言い返せない。それ知つてのことかさらには付け込み彼女はさらりと言つてゐる。

「あなたは平民みたいな服しか持つていなんですね、いつそこのまま平民にでもなればいいんですね。」

流石に言い過ぎだろ、これでもギルバード家の歴史は長く、由緒正しい貴族だ。金や地位は無くとも誇りはある。言い返したい、すぐ言い返したいけど、

コイツことアイリス・ヴォルヘルクの親は王国の賢者ワイスマガスに選ばれる人で、中央庁のトップである。下手に言い返そるものなら、親父の首が飛ぶだけならまだしも務めている研究所こと潰されかねない。家の敵に回つたら国内中の全ての人が敵に回るのと同義である。

ちくしょうが、

「それで、貧乏貴族は何をしに行つたのですの？」

人の体をじろじろと見てきたので、髪を耳にかけてイヤリングを見せつけてやつた。このイヤリングはとても高価なことは分かるが、正確な値段などは知らない。上級貴族のアイリスなら知つてているだろつともつたのだが案の定知つてゐるらしく、いつもの毒舌の前に「なんていふことですの！」と悲鳴に近い声を上げた。

「……あなた家宅でも質にいれましたのですか？中央通りにあるセキノアのイヤリングではありますんの、そんなの私でも持つていな印度です。」

……………じゅじゅとんでもない物をもじりてしまつたみたいだ。

その後、俺がそのイヤリングを身に付けていることがよほど気に食わなかつたみたいで自分の自慢話をし始めてしまつた。パパにもらつたブランド品が、家柄が、など何回も聞かされた事ばかりあるいつものありがたくてあくびが出まくる話だ。

（こんな時はいつもの手でと……）

ズボンの中に隠してあるチョークに手をやり、慣れた手つきで地面に魔法陣を書いていく、単純なものとはいえ良くここまで早く書けるようになつたのも目の前の奴のおかげだ、さすがに毎回毎回やれば慣れてしまつ。

今書いているのは土鍊術の一種の比較的簡単なもので、そこらへんの魔法が習いたての奴でも使えるようなものである。

よつやく書き終わつたがその間わずか20秒、成長したな俺。

書き終わつた魔法陣に手をかざし魔力を注いでいく。何故こんな堂々とやつているかとゆうと本人は話すことに夢中になりすぎているせいで気付かないのだ。

陣の内部の土が成形されて、次第に俺そつくりの人形が出来上がつてくる。昔は抵抗と恥じらいがあつたのだが今はそんなのは感じない。慣れるとは恐ろしいことだ。

出来上がつた特製フレイマン身代り人形を置き、立ち去る。  
本当になんで気付かないのだろう?

家の門をくぐつたあたりで「またいつものこれですのーどこ行ったんですのーー」と聞こえたが無視して家の中に入る。

疲れた、早く寝よつ……

時は少し遡り……

ガラガラ、馬車の中にひたすらでフレイと一緒に買い物をして、た少女と初老の男性が乗つてくる。

「今日は済まなかつたわね、爺や」

「まつたぐ、時間を使うのは淑女としてのマナーですぞ、姫さま」

「わかつてゐるわよ、でもそんなことひき指摘されたりきつこわよ」

「ハア……姫様、少しづ」自分のお立場とひつものをお考えになつてくだされ。いいですか、仮にも第一王女たるもののが街にお一人で出でいくこと自体が間違いですじや

「うるさいわね、爺や。それに護衛でも付けたらのんびり買い物なんて出来やしないじやない」

「ですが万が一御命を狙われでもしたら

「まつ黙つてて

「むう……少しは爺やの気持ちをくみ取つて下され」

「こいから、黙つてなさい！」

そつ一言言い残し窓の外を見る。外はもう暗くなつてきつていて周囲の景色も満足に見えないがそれでも爺やからの説教を受けるより断然マシだ。

（ふう、疲れてるのに爺やの相手なんかしてられないわよ。そういうえば今日会つたあの人、最初に声を掛けられた時はびつくりして気が動転して気が付かなかつたけどなんであの人に“姿隠し”と“気配遮断”の魔法が効いてなかつたんだろう？話掛けられる前つまり自分で魔法を解くまでは確かに発動していたしちゃんと効力はあつた。でも、あの人には効かなかつた……まあいいわ眠い時に難しいことじ“じちや”じちや考えるの好きじやないし。）

「ふああ～、まだ着かないの？」

「もう少しですかお待ちください、それに淑女があぐびなどするものではあつませんぞ」

「ムウ～もういいわ、私寝るから着いたら起こして、おやすみ～

「……ハア、先が思いやられますな」

-----

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3986m/>

---

ソロモンの鍵

2010年10月10日21時11分発行